

トラック 40-2

昔々、父親と母親がいた。彼らは一緒に暮らし、男の子がひとり生まれた。この子は父親に提案した。

「勉強をしに行くのがいいと思うよ。こうやってくすぶっていたら、何が起きているかまったく知らないままだから」。

父親は言った。

「それじゃ、お前が勉強出来るようにどこかに遣ろう」。

父親の甥がとても遠いところに住んでいたが、彼が手紙を送ってくる度に、父親は息子にそれを読んでくれるよう頼んだ。

「一体どういうわけで、僕に手紙を読んでほしいなんて思うのですか。僕は勉強するために学校に行かせてもらえないというのに。あなたに手紙を読むなんて出来ませんよ」。

父親は手紙を取り、外に出て手紙を読んでくれる誰かを探しに行った。彼は息子と同年ぐらいの子を見つけて、手紙を読んでもらうように頼んだ。

「だめです。あなたのために読むわけにはいきません。だって、あなたの子供は私と同じ年だし、手紙については自分で何とかして下さい」。

そうして、父親は読んでくれる人を見つけた。その人は手紙を読んで父親に言った。

「あなたの甥がお金を送ったと書いてありますよ」。

「なんとまあ、それじゃお金を取りに行きますから付いて来て下さい」。

彼らは二人で、金を引き出せるところまで行った。[手紙を読んだ]若者が言った。

「ご主人、私が書類を持って行って私が中に入ってお金を取ってきたほうがいいでしょう」。

それが 50000 フランであったにも関わらず、その若者は「10000 フラン送られてきましたよ」と言って、10000 フランを父親のために引き出した。

父親は家に着いて言った。

「神のお恵みを甥に、あいつがこの 10000 フラン送ってくれた」。

その後、息子は父親に、勉強しに行かせてくれと懇願し、父親は答えた。

「お前が勉強に行くのは好ましいことだ。私の手紙を読んでくれる人を見つけるのに苦労したから」。彼は息子を勉強に遣った。

甥がまた手紙を寄越し、父親は、息子がまだ十分に学んでいないので、誰か読んでくれる人を探した方がいいと思った。そうして、彼はまたペテンに引っかかってしまった。50000 フランもらう代わりに、10000 フランしか渡されなかった。息子はしっかり学んで、手紙を取ってそれらを読んで父親に言った。

「父さん、このお金だけど、ペテンにかけられたようです」。

父親は答えた。

「何をすれば、どうすべきだったのか。息子にはずっと前から勉強に行くように言っていたのに、彼は望まなかった」。

子供が父親に対して、勉強に行かせてもらうよう頼んで、父親がそれを拒絶している間、父親は子供に、山羊を連れて野原に行ってそこで学ぶよう言った。というのも、その当時に勉強した人た

ちはそこで勉強をしたのだが、今の人々には混乱でしかなく勉強などはない。

子供は勉強を続け、申し出た。

「僕は旅に出たほうが良いと思います。僕が出て行くと、家族の中で少なくとも何かは変わるでしょうし」。

しかし父親は答えた。

「だめだ。もし金があつてお前に与えたとしても、お前は浪費するだろう。私は金を持って別の家に行つて結婚することにする」。

父親は、お金を持って他の家に結婚しに行った。少年と母親はかくして二人だけで暮らすことになったが、やがて少年は母親に提案した。

「母さん、[畑を]売つて僕は出発します。多分そうした方が、うちの家族を変えることが出来るでしょう」。

そこで母親は友人に話した。

「誰か見つけてくれると、私は自分の畑を売る準備があります。しかもとても急いでいます」。

彼女の友だちが、畑を買うことを了承してくれる人を見つけて、彼らは契約した。彼らは売買契約を交わし、母親はお金を持って準備をし、子供は出発した。

子供が旅をしている時、父親にそのことが知らされた。

「あなたの息子が旅に出た」。

「旅にだって？ うちの息子が？」。

「どうしてあんたの息子なんだ。あんたは金を持っていたのに、子供の面倒を見なかったのかい？ 今こそ[金が]役に立つだろう。自分の子供だってあんたは言ったのか？」。

「そうだ、お気に入りの息子だ」。

父親はすぐに二軒目の家から叩き出された、しかし彼は最初の家には戻ろうとしなかった。というのも、他の女性と結婚するために全財産を持ち出したからだった。二軒目の家は彼の元の小屋だった。息子の友人は相変わらず報告を持って来た。

「今日、あなたの息子が箱を送ってきた」。

父親は答えた。

「お気に入りの息子なんだ」。

「いや、お気に入りの息子なんかではない。あなたは財産を持っていた時に、子供のことに構わなかったのに、彼が異国にいる今になって、お気に入りの息子だなんていうのか？」。

父親は愛惜の情と、妻と住んでいるのではなく、洞窟に住んでいるという事実を心に痛めた。ほどなく彼は病気になった。この病気は、誰かに病院に運んでもらわなくてはいけないと彼は言った。

「しかし、どうやってあんたを病院に運ぶんだ？」。

「息子に、私が病院に行けるように何か(金)送ってくれるよう、教えてやってくれないか？」。

子供の友人は、異国にいる子供に手紙を書いた。

「急を要することが起こった。君の父親が病気になって座ることも出来ない」。

息子は旅立ち、国に帰つて父親を病院に連れて行った。しかし、医者たちは子供に、父親はどんな病気にも罹っていないと言った。

「彼があのようになったのは、何か問題を抱えているに違いないし、いずれにしても病気ではな

い」。

子供は父親に尋ねに行った。

「父さん、あなたをそのようにしているのはどういう問題ですか？ 医者はあなたはどこも悪くないと言っています」。

「実は、お前の母親と復縁したいのだ」。

「そういうことなら、僕が母さんに打診をしてきます」。

彼は、母親に説明に出かけた。

「父さんに譲歩してください。ご存知のように父さんは老いて、苦しんでいます」。

「それじゃ、お前は父さんが私たちにしたことを覚えていないの？ 私たちの財産を全部取って、私たちに何もしないで、出て行ったことを？」。

「でも、それは過去のことで、やり直すことはできません。父さんが母さんと復縁することを受け入れて下さい。それで父さんもおとなしくなるでしょう」。

「お前は私の息子だから、お前に免じて受け入れましょう。彼や他の人のためなら受け入れはしません」。

そこで息子は、父親に知らせに行った。

「一緒に家に戻って住むことにしましょう」。

「ああ、よかった。では行こう、息子よ」。

彼らは家に戻り、母親と和解した。そして、息子の邪魔をしようとする人がいたら、父親はこう言った。

「放っておいてくれ、あれは私の息子なのだ。放っておいてくれ」。

これが私のお話だ。